

日本語左方転位構文の再検討

—コミュニケーション上の働きに注目して—

居關友里子（国立国語研究所） 大江元貴（金沢大学） 鈴木彩香（国立国語研究所）

1. はじめに

1.1. 考察対象

本研究の分析対象は、日本語のいわゆる「左方転位 (left dislocation)」構文である。

- (1) 二十一世紀に残したいもの それは自然と平和です。 えー最近あの一こ私が子供の頃に比べるとトンボの数が無性に少なくなったような気がします。 (CSJ)
- (2) 最近よく聞くブログと言うことば, これは何を指すのでしょうか？ ホームページのことですか？ 初歩的な質問でスイマセン。 (BCCWJ)

日本語では、左方転位要素（「二十一世紀に残したいもの」「最近よく聞くブログと言うことば」）は無助詞成分として実現し、それと同一指示の解釈を受ける代名詞的要素（「それ」「これ」）が後続節に現れる。

1.2. 研究の背景

左方転位構文に関する先行研究は統語的特徴の記述（牧野 1980, 井上 1987 ほか）から、現在日本語の左方転位構文の意味・機能の詳細を検討する研究へと広がりを見せ、他言語との差異や多機能性が注目されてきている。例えば通言語的に左方転位構文は「主題の転換（先行談話の主題とは異なる主題を表示, 導入する）」に用いられるとされてきたが（Lambrecht 2001 ほか）、日本語の左方転位構文では焦点も導入できることや（山泉 2013）(3), 「主題の転換」のほか「時間の確保・引き延ばし」のために用いられる左方転位構文があることが指摘されている（海寶 2013）(4)。

- (3) A: 誰が一郎の母ですか?
B: 山田花子, 彼女が一郎の母です。 (山泉 2013: 47)
- (4) A: 山田ってどんなやつだい?
B: 山田, 彼はいいやつだよ。 (海寶 2013: 46)

1.3. 本発表の立場と目的

このように複数の用法を積極的に認める方向で捉え直されてきている左方転位構文には、しかしながら、「主題の転換」「時間の確保・引き延ばし」のいずれとも解釈しにくい用例の存在が指摘できる。

- (5) 森と湖の国フィンランドは北緯六十度と七十度の間に位置し国土の三分の一は北極圏内になっています。ちなみに北緯六十度はカムチャッカ半島の付け根にちょうど当たります。全体の面積は三十三万八千平方キロメートルで日本の約九十パーセントの面積に当たります。十八万八千個もの湖を有し国土の六十九パーセントが森林です。これはウラジュリこれはブラジルに次ぐ森林保有国となっております。まさしく森と湖の国 それがフィンランドという国なのです。 (CSJ)

加えて「左方転位構文は話し言葉的である」（山泉 2013）とされながらも、話し言葉が用いられる典型といえる対話における使用を想定して作られた作例(3)(4)は自然な発話とはいえず、また実際の使用例も見出しにくい。このような対話で用いる場合には、(6)(7)のような言語的な助けが必要となると考えられ、同じ「話し言葉」の中にもその使用には偏りが存在するといえる。

- (6) A: 誰が一郎の母ですか?
B: 山田花子, いや, 山田葉子, 彼女が母です。 (海寶 2013: 47)
- (7) A: 山田ってどんなやつだい?
B: 山田, えーと, 彼はいいやつだよ。 (海寶 2013: 47)

以下ではこれらの事実を足がかりとし日本語の左方転位構文の特徴づけの見直しを行う。1.2 節で取り上げた研究動向を踏まえつつ「話し言葉で用いられる」という特徴を精緻化するために、本研究は「構文は談話から独立した独自の意味

を備えている」という前提を一旦取り払い、コミュニケーション運営上の働きに着目しながら実例を観察する。2 節では日本語の左方転位構文を談話展開に注目して再整理し見出されたタイプ〈予告・総括〉と〈離脱〉について報告する。続く 3 節では具体的な言語使用の場とこの構文がどのように結びついているのか、左方転位構文の本質的な性格について検討を行う。

2. 左方転位構文が用いられる文脈の再整理

コーパスに出現していた左方転位構文について、その談話展開上の出現位置や発話の組み立ての特徴に注目すると、「状況の大局的組み立てに動機づけられたもの」と「局所的状況への対応に動機づけられたもの」が見出された。2.1 節、2.2 節では両タイプの中心的特徴を確認する。

2.1. 状況の大局的組み立てに動機づけられた左方転位構文

左方転位構文で導入された対象について、さらなる込み入った内容の解説が左方転位構文の後文脈で展開されるものである。ここで左方転位構文は後続する長い解説の〈予告〉として機能している。

- (8) 二十一世紀に残したいもの それは自然と平和です。えー最近あの一こ私が子供の頃に比べるとトンボの数数が無性に少なくなったような気がします。(CSJ)
- (9)? (私が) 二十一世紀に残したいもの それは自然と平和です。以上です。
- (10) (……) テキサスの牧場主は、この難局をどう乗り切るでしょう。たぶん、国民の目を中東に向けさせイラクあたりを攻撃して軍需産業だけは「景気回復」というのが関の山だと思います。世界の資本主義のお手本だったアメリカ, それが今揺らいでいます。エンロンから MCI ワールドコム、ゼロックスと粉飾決算の連続。「他にもまだまだ出てくるぞ」と会社の信頼が崩れた結果ではないでしょうか? (…)(海寶 2013: 46)
- (8): 二十一世紀に残したいものは自然と平和である→そう思う理由の解説
- (10): 世界の資本主義のお手本だったアメリカが今揺らいでいる→その具体的内容の解説

(11) のように、左方転位構文で示される命題の解説を自身で行うのではなく他者に求める場合にも使用され得る。この場合でも、比較的込み入った内容の解説が想定される方が自然な使用となる。

- (11) 最近よく聞くブログと言うことば, これは何を指すのでしょうか? ((2)を一部省略)
- (12)? ブラジルの首都, それはどこですか。教えてください。

もう一つ、出現位置は異なるものの〈予告〉と同様比較的長く込み入った内容の解説と結びついた左方転位構文が観察される。これは解説の末尾、まとめ上げる位置に現れるもので、前文脈の長い解説の〈総括〉として機能しているものである。

- (13) 森と湖の国フィンランドは (…)これはブラジルに次ぐ森林保有国となっております。まさしく森と湖の国 それがフィンランドという国なのです。((5)を一部省略)
- (14) 演習最後の日、みぞれ混りの雨と冷たい北風が、薄暗くなった宿営地に冬将軍の訪れを告げ、夜半から雨が一段と強くなり、2, 3の天幕は吹き飛ばされた。(…)初めての演習は、雨で始まって雪で終わった。北海道に来て忘れることのできない演習であった。余りにも早い冬の訪れと、先に待ち受ける厳しい冬, これが北海道の本当の姿なのだ。この冬を越してこそ、北辺の第一線に來たかいがある。(…)(BCCWJ)
- (13): フィンランドの解説→「森と湖の国」
- (14): 演習の時の状況解説→「あまりにも早い冬の訪れと、先に待ち受ける厳しい冬」

これらは左方転位要素と前文脈の結びつきが強く聞かれるため転位要素を代名詞的要素の位置に戻すと許容度が落ちる。

- (16)? (…)これはブラジルに次ぐ森林保有国となっております。まさしく森と湖の国がフィンランドという国なのです。

多くの先行研究は、〈予告〉として現れる左方転位構文に着目し、「主題の転換」という機能を持つことを主張してきたが、〈総括〉として現れる例を考慮すると、左方転位構文の本質的な特徴は「主題の転換」ではないと考えられる。〈予告・総括〉の例は、左方転位構文が現れる談話上の位置が異なるのみで、談話の大局的な組み立てに寄与するものであるという共通した特徴が見出せる。

2.2. 局所的状況への対応に動機づけられた左方転位構文

海寶 (2013) が「時間の確保・引き伸ばし」として指摘するように、何らかの心的処理や補足説明などのための一時的な本筋からの〈離脱〉に際しても左方転位構文が出現している。ただし(6)(7)や以下の(17)(18)のように「いや」「えー

(と)」「あー」などの感動詞・フィラーと共に起した際、あるいは発話速度や声の高さを左方転位要素以前と以降で変化させるといった操作を伴う場合は自然であるのに対し、(3)(4)のように淀みなくなされた発話は不自然に聞かれる。

(17) えーっともう一つあこれと言っちゃえ二千二年のワールドカップサッカー大会の準決勝を行なうえーっと埼玉スタジアムそれが浦和市の美園地区にただ今建設中です。(CSJ)

(18) それからBに示しましたようにえ録音されたものCDですとかテレビだとかそういうものでえーよく聞いているかどうかというスコアとスコアがえー高ければ高い程え原型と変形のしょうちゅし聴取時間の差これは差の絶対値ですがえー高水準で相関が認められましたで次にえー結果をまとめたいと思います (CSJ)

2.3. ここまでの観察のまとめ

〈予告・総括〉は計画的な談話の中で、談話の構造を示すことに寄与するものであり、後文脈での解説への準備、あるいは前文脈のまとめ上げとして聞くことを相手に促す。大局的な談話展開、計画的な発話の組み立てと結びついて機能することから「作り上げられた」「磨かれた」発話としての印象を与える。対する〈離脱〉はより局所的な談話の調整と結びついて機能するものであり、左方転位部分で一旦発話の流れを切ることを表示する。心的処理への集中のほか補足説明の挿入などに動機づけられ、実時間性を備えているという話し言葉の特徴と結びついた使用であるといえる。発話の流れを差し止める理由が、フィラー（発話を計画しながら発話を行っていることの表示）や発話速度の変化（代名詞的要素以降が、転位要素と直接つながるものではないことの表示）などといった音声的操作によって示されることで、計画的な発話の組み立てによる〈予告・総括〉ではなく〈離脱〉として解釈されることが考えられる。

以上のように一口に左方転位構文と言っても、当該の談話展開との結びつきかたには異なるタイプが存在している。これらの観察をもとに対話を模した(3)(4)の作例について考察してみたい。ここでの不自然さは各タイプが持つ「話し言葉で用いられる」以上の要請を満たすよう文脈を整えることで緩和されると考えられる。(3)(4)が左方転位構文を用いているのは情報要求に対する端的な応答であり、ここには計画性を読み込むことができない。これを長い解説の〈予告〉(Bによる「推理の披露」)や〈総括〉として解釈されやすい文脈を整えるといくらか不自然さが解消される。

(19) A: 刑事さん、それじゃあ犯人は、まさか？

B: そう、山田花子、彼女がこの一連の事件の犯人だ！

(20) A: 山田ってどんなやつだい？

B: 山田は一見強面だけど、とても思いやりがあって、この前だって落ち込んだ僕のそばにずっといて励ましてくれたんだ。人を笑わせるのも上手だし。山田、彼は本当にいいやつだよ。

あるいは(6)(7)の例のように〈離脱〉と結びついた言語要素を共起させ、〈離脱〉の解釈を促すことによっても許容度が上がる。

3. 左方転位構文に共通する特徴とは

2節で見てきたように左方転位構文の特徴を考察する上では一文・一発話内の現れだけを観察するのではなく、文脈上どのような位置で、またどのような動機で現れるのかということに着目して観察する必要があることが分かる。続いて本節では左方転位構文に共通する特徴について、性格の異なるコーパスにおける生起の特徴を手がかりに考察する。

3.1. 方法

扱ったのは話し言葉の性質を反映する資料として「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」「名大会話コーパス」「現日研・職場談話コーパス」、また書き言葉における振る舞いも確認するために「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」以上四種類のコーパスである。左方転位構文の一つとして、左方転位要素として名詞句を、同一指示の解釈を受ける代名詞的要素として「それ／これ」、後続する助詞として「は／が」をとるものに限定し、その出現数を観察した¹。

なお特に話し言葉の実例を扱うに際しては、文の境界がはっきりと決められないケースが多くある。そのため左方転位要素がそれだけで名詞一語文になっていると解釈できる例も観察される。本多 (2005:250) でも(21)のような例も左方転位構文と解釈可能であるという見解が示されている。

(21) かつくら。あそこはいいね。

本研究も同様の立場に立ち、左方転位要素の後ろに句点が置かれるものも出現数に含めることとする。

¹ CSJ はコアおよび非コアに人手修正がなされたもの (100 万語)、BCCWJ はコア (100 万語)、名大会話コーパスおよび職場談話コーパスは全体 (それぞれ 112 万語、18 万語) を検索対象とした。

3.2. 結果

左方転位構文の条件に該当しないものを除いた各コーパスでの出現数は以下の表の通りである。まず独話の性質を持つ話し言葉 (CSJ) と書き言葉 (BCCWJ) での出現数を比較すると CSJ での出現が目立って多く、左方転位構文は話し言葉的であるという先行研究の指摘を支持する結果が観察される。

表 コーパス別出現頻度

	CSJ	BCCWJ	名大会話+職場談話
左方転位構文	89	16	9

しかしここに対話における話し言葉資料として特徴づけられる名大会話コーパスと職場談話コーパスの結果を並べてみると、左方転位構文の出現は BCCWJ よりも少ない。さらにこの出現場面を見てみると、そのほとんどが会議などでの「報告」に位置づけられるようなものであった。ここから、左方転位構文は相槌も含め聞き手の発話が途中に挟まれず、一人の話し手・書き手が単独で述べ立てる「独話」の性質と馴染みが良いと考えられる。

以上のことを踏まえると、話し言葉性や談話の計画の射程以外に左方転位構文の本質的な特徴を求める必要がある。ここで話し手ではなく聞き手側に期待される振る舞いに焦点を移してみる。〈総括・予告〉と聞かれるものは、この文全体を一連の談話の要点として提示するに際し転位要素で一度切ることで聞き手の注意を集め (共同注意: 本多 2005)、その後の発話を聞かせるものであった。転位要素の直後の間合いに、聞き手が相槌を打つようなことは期待されない。これは主題名詞句に助詞を付加した場合 (しばしば上昇下降調などの韻律操作や間投助詞とともに出現する) に相槌が要求されることと対照的である。〈離脱〉もこの性質を共有しており、左方転位要素直後の間合いは聞き手の発話を誘うものではなく、注意をひきつつ直後に代名詞要素で受けることによって話し手は一貫して話し続ける姿勢を表示し続ける。

左方転位構文は聞き手の注目を集めながらも能動的な介入を抑制し、一定時間を話し手が独演的に場を維持、制御することを可能にしている。話し手が語りを披露し聞き手がそれを受容するというような場を生み出すよう働いていると考えられる。

4. おわりに

本研究では日本語の左方転位構文を、談話展開に着目した観察を通して「状況の大局的組み立てに動機づけられたもの」(〈予告・総括〉) と「局所的状況への対応に動機づけられたもの」(〈離脱〉) に再整理した。「対象を表象として投機することによってそれに対する共同注意を成立させ、しかる後におもむろにそれについて解説を語る、という構文」(本多 2005: 251)、左方転位の機能は、「何らかの情報構造的役割 (主題や焦点) をアナウンスすることである」(山泉 2013: 441) など、左方転位構文を単独で抜き出してその意味・機能を見出そうとすると抽象的な記述に偏りがちであり、日本語の中での左方転位構文の位置づけが見えにくくなっていたところからの脱却を試みた。ここから見えてくる左方転位構文の本質的特徴は、話し手による語りの披露の文脈を想起させること、それによって聞き手のやり取りへの関わり方を方向づけるという側面にあると考えられる。

本研究は左方転位構文が具体的なコミュニケーションの状況で用いられるという側面を重視することにより、左方転位構文の出現環境と自然さを把握することを試みた。「正文／非文」の対立を示そうとする作例では見落とされやすく、しかし構文の使用に際し私たちが参照している重要な要因「コミュニケーション上適当／不適当」が、今後の構文研究においても有効であることが示唆される。

参考文献

- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』大修館書店。
海寶康臣 (2013) 「主語名詞句が左方転位化されている日英語の左方転位構文」『日本語用論学会大会発表論文集』8, pp. 41-48.
本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会。
牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法一日・英比較対照』大修館書店。
山泉実 (2013) 「左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司 (編) 『名詞句の世界—その解釈と意味の神秘に迫る—』 pp. 431-457. ひつじ書房。
Lambrecht, K. (2001) Dislocation. In Haspelmath, M., König, E., Oesterreicher, W. & Raible, W. (eds.), *Language Typology and Language Universals 2*. pp. 1050-1078. Berlin: Walter de Gruyter.